

---

# 魔法先生ネギま！普通？の先生がゆく

ゴブリン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギま！普通？の先生がゆく

### 【Nコード】

N2679P

### 【作者名】

ゴ布林

### 【あらすじ】

麻帆良で先生は隠れた魔法使い？

見た目は平凡しかし魔法使える先生

不定期に更新しますので更新はいつになるかわかりません

違う作品も同時に書くので更新は遅いと思いますがよろしくお願いします

ネギが麻帆良に来るところから始まります

## 主人公紹介（前書き）

前回の作品と同じくいつ投稿するかわかりません  
それでもよろしければ読んでください

12月18日修正しました

## 主人公紹介

### 主人公設定

#### 名前

沢田 守孝さわだ もりたか

#### 性別・年齢

男・24歳

#### 身長

175CM

#### 体重

48kg

#### 容姿

髪、瞳ともに黒色で髪型は耳にかかるかからないか位のちょつとくせのある感じのかみ

#### 所属

2-A副担任

#### 詳細

7歳の時に麻帆良学園に来て中学の時エヴァと同じ学年だった魔力がナギ並みにありいつも指輪で魔力を隠している（指輪は麻帆良に行く前に親からもらいはずしてはいけないと言われた）

中学2年生の時にエヴァに魔力がばれて呪いを解除できるかもしれないと思ひ弟子にされた

学園の外に出れるように一応したが1日しか持たないしかし後ネギの血があれば呪いを解くことができる

認識障害がきかず小さい頃から可笑しいと思っていた（学園のもエヴァのも効かない）

#### 特技に魔法具生成

学園側は魔法を使うことは知らない、知っているのはエヴァとチャチャゼロと茶々丸のみ

すでにエヴァクラスの魔法使い  
顔がばれないように戦闘の時は黒い鎧を着ている（イメージファイ  
ヤーエンブレムの漆黒の騎士）  
エヴァの家に居候中  
闇・火・雷の属性

## 主人公紹介（後書き）

このような設定でよろしいのであれば読んでください

子供先生現る！？（前書き）

投稿しますが文章がおかしかったり誤字脱字があったら教えてください  
さい

学園長室での話までです

## 子供先生現る！？

皆さんはじめまして私麻帆良学園の女子中学校で教師をしております沢田 守孝と申します

今日は新しい先生が来るらしいので学園長室に向かつておりますさて、どのような先生が来るんでしょうか？楽しみです

学園長室の前に指導教員のしずな先生が立っていました

「あら、沢田先生おはようございます」

『おはようございますしずな先生。新しい先生はどのような方ですか？』

「見てからの楽しみですよきつと驚きますから」

『は、はあ・・・』

《・・・うむわかった！では今日から早速やつてもらおうかの指導教員のしずな先生と副担任の沢田先生を紹介しよう》

「では、はいりましょうか」

『はい』

しずな先生が扉を開けて入ると

「む」

なにやら声が聞こえた

「あら御免なさい」

『はあっ！？』

「分からないことがあったら彼らに聞くといい」

『学園長？どういうことです？何故子供が先生なのですか？いつもいつも学園長は法律を無視しますね！労働基準法というものをご存知ですか？この子どう見ても小学生でしょう！義務教育はどうしたんですかつ！まったくその糞長い後頭部には何が入ってるのやら？もしかして豆腐でも入ってるんですか？このぬらりひょめ魑魅魍魎の主が！後頭部削ってくださいはいつきり言っつて初めに子供のころ見てその後頭部夢に出てきましたよ』



「最後の方酷くないかのお・・・」

「まだまだ言いたいことはたくさんあるんだがまあいい」

『で？先生お名前は？』

「あつネギ・スプリングフィールドです」

「スプリングフィールド？どこかで聞いたことがあるような？」

「よろしくね」

『まあよろしくお願いしますね ハアッ』

「そうそうもう一つこのか アスナちゃん暫くはネギ君お前たちの部屋に泊めてもらえんかのまだ住む所きまっとらんのじゃよ」

「この妖怪なんて言いやがった？」

『近衛さん？ハンマー持ってましたよね？貸してくれませんか？』

「きつと今私はとてもいい笑顔になっているでしょう」

「もつとるけど何に使うん？」

『妖怪退治ですよ』

「ならええよー」

「このか貸してはいかんぞわしが殺されてしまう」

「うーん、一応おじいちゃんやし殺されんのみたくないから許したげて？」

『今回だけですよ』

「何から何まで学園長ーっ」

「かわえーよこの子」

「ガキは嫌いなんだってばっ」

「仲良くしなさい」

『もう少しでホームルームが始まるので行きますよ』

結局ネギ先生は神楽坂さんと近衛さんの部屋に泊まることになった

続く

子供先生現る！？（後書き）

明日か明後日位に2話目を投稿します

## 2話（前書き）

本日更新します

文章などがおかしい場合はお知らせください  
修正いたします  
では今回もどうぞ

## 2話

『はあ……』

ネギ先生に会ってから私はため息が多くなりましたね  
まだ10分くらいしかたっていないというのに何故この二人は仲好  
く出来ないんだろうか

む……っ

ふんっ

「あの…」

「あんたなんかと一緒に暮らすなんてお断りよ！！寝袋でも暮ら  
せばいいでしょ…」

10歳にそれはきつすぎるような気がしますですが気持ちわかります、  
いきなり見ず知らずの異性と暮らせと言われてはこうなるのも仕方  
ありませんね……

「じゃあ私は先に行きますから先生！！」

「あ…」

「酷いなー」

「ふん」

「なんですかあの人は……」

「ウフフ…あの子はいつも元気だからねでもいい子よ」

『良い子なのは同感なんです元気すぎるというかなんというか…  
しかし何故こんなことになったんですか？いくら神楽坂さんが子供  
嫌いでもこんなに言うことはなはずですが、ネギ先生何かしました  
か？』

「あ…はい、朝に占いで失恋の相が出ていると言ってしまったんで  
す」

だからあんなに怒っていたんですか納得しました

『彼女は年頃の女の子ですよ？失恋の相が出ているなんて言われたら怒るのも当たり前でしょう』

「でも、僕は本当のことしか言っていないのに…」

この子は一般常識が足りませんね

『言っではいけない事もあるんですよ分かりましたか？』

「はい……」

「はいこれクラス名簿」

「あ、どうも」

「それよりも授業の方は大丈夫なの？ネギ君」

『まあ私も教室にいますので緊張せずに頑張ってくださいませ』

「あ…う…ちよつとキンチョーしてきました」

「ほらここがあなたのクラスよ」

『よく罾が仕掛けられているので気を付けてくださいね』

「あ、はい」

このクラスは特徴のある人が多いですから覚えやすいでしょう

「早くみんなの顔と名前覚えられるといいわね」

「あうっ…」

『このクラスはほかのクラスよりも覚えやすいと思いますよ？特徴的です』

「まあ…そうね…」

十中八九罾があるでしょうから私が先に入った方がいいでしょう

『あのネギs「失礼しま…」あ…』

黒板消しトラップですかよけるのは簡単ですね

ぴたっ…

黒板消しがネギ先生に当たる直前で止まりました

彼は魔法使いでしたか…障壁ぐらい切っておきましようよ

ざわっ…

クラスのみんなが不審に思っていますよ？

ポフッ

「あらあら」

「ゲホゲホいやー、あはは、なるほど、ゲホ、引つかかつちやたな  
あ、ゴホ」

ガッ

ネギ君の足にひもが引つ掛かりましたね次は何でしょうか

「へぼっ！あばああああぎやふんっ」

見事にバケツが頭に当たりおもちゃの弓矢が当たり机にぶつかりましたね

「あらあら」

『はあっ…』

「えっ…」

「あ…あれ……？」

「えーっ子供！？」

「きみ大丈夫！？」

「ごめんでつきり沢田先生だと思って」

『私なら罠にかつてもよかったと思っっているんですか？罠を仕掛けた人今すぐ名乗りだしなさい』

「内緒ですよ先生」

『なら全員に宿題＋5枚ですね』

「鳴滝姉妹と春日です！」

『そうですかなら3人は放課後新田先生に怒られてきなさい話は通しておきます』

「…ええーっ」「…」

『ならあなた達だけプリンタ5枚プラスして新田先生の後に私も説教させていただきます』

「その子はあなた達の新しい先生よ。さ、自己紹介してもらおうかしら」

「は、はい」

「ええとあ…あの…ぼく…ぼく…今日からこの学校でまほ…英語を教えることになりましたネギ・スプリングフィールドです。三学期の間だけですけどよろしくおねがいします」

[illegible]

大音量です。ね周りのクラスに迷惑でしょうけどこのテンションのクラスを止めることは不可能です

しずな先生の隣に立っていると長谷川さんが

「マジなんですか？」

「ええマジなんです」

『こちらマジかと聞きたいところですよ……』

「やっぱり普通なのは沢田先生だけだ……」

長谷川さんとはこの学園はおかしいという話をして意気投合しました

「ネギ君はちゃんと教師の資格を持っているけど見ての通りあなた

達よりも年下よ。お手柔らかにね」

神楽坂さんがネギ先生に近付いて

「ねえあんたさつき黒板消しになんかしなかった？なんかおかしくない？あんた」

早速魔法がばれかけていますね、さてどうなるんでしょうか？

続  
く

## 2 話（後書き）

中途半端なところで終わった上に全然進まずにすいませんでした  
ご意見感想よろしくお願いします



### 第3話（前書き）

1 週間以上更新できずにすいませんでした

これからは学校が終わったら1話ずつ書いていこうと思います  
短いですがよろしくお願いします

“ ” は念話です

### 第3話

「キツチリ説明しなさいよー」

「あうあうー」

「いいかげんになさい!!」

バンバン

「皆さんも席に戻って先生がお困りになつてゐるでしょう?」

流石は雪広さんですねしかしこの後に必ず問題を起こすので止めるのが大変ですし周りの人たちは止めようとせずにトトカルチョやりだして止まりませんしこのクラスの副担任も大変です

「アスナさんもその手を離したらどう? もつともあなたみたいな凶暴なおサルさんにはそのポーズがお似合いでしょうけど」

「なんですって?」

「ネギ先生、ネギ先生はオックスフォードをお出になつた天才だとお聞きしておりますわ教えるのに年齢は関係ございませんどうぞHRをお続けになってください」

雪広さんはいつもはちゃんとしているのにある特定の人間が絡むとそれにしても教えるのに年齢は関係あると思いますよ?

「は……どうも」

「委員長何いい子ぶつてんのよアンタ!

「あら……いい子なんだからいい子に見えてしまうのは当然でしょ」

「何がいい子よこのシヨタコン」

「なっ」

「言いがかりはおやめなさいあんたなんかオヤジ趣味のくせにいい」  
「なっ」

「知ってるのよあなた高畑先生のこと…」

「うぎゃあーその先を言うんじゃねーこの女ーっ」

「あの…やめ……」

「やれやれー!」

そろそろ止めますか…

『やめなさい!雪広さん神楽坂さん、はい周りも煽らないで!時間ももうないので授業を始めます。ネギ先生お願いしますね』

「あ…はい」

『暫くの間は見ているので分からないところがあつたら質問に来てくださいね、あと…くれぐれも生徒のことをバカにしないでくださいね』

さて、注意もしましたし授業の様子を見るために後ろに行きますか…

“おいっ守孝”

“あっエヴァさんどうしましたか?”

“話すことがあるから今日は早めに帰ってこい!分かったな!”

“わかりましたよ出来るだけ早く帰りますよ”

さて、話とは何なんでしょうね?授業の様子は…また雪広さんと神楽坂さんが取っ組み合いをやってますね

原因はなんとなくわかるんですが多分ネギ先生を怪しがった神楽坂さんが何かをして雪広さんがまた何か言っただけでしょうね…ネギ先生は止められないし先生としてはどうなのでしょうね  
ネギ先生は近いうちだれかに魔法がばれるでしょうね…

魔法についてはフォローしません

キンコーンカーン

「あ…終わっちゃった…」

授業は全く進みませんでしたねネギ先生は先生に向いてないんじゃないでしょうか

「むむ……あいつやっぱ何でもなかったのかー……」

「あんたらしいつも元気やなー、今日は沢田先生も止めへんかったしどうしたんやろーな」

「確かにいつも沢田先生は止めてたけど今日は止めなかったわね」

『その答えを教えましょうか？』

「わっ」

「先生神出鬼没やなー」

『ネギ先生が先生に向いているのかどうか第一の理由ですね』

「そんで先生から見たらどーやったん？」

『全く駄目ですね、喧嘩を止めることもできないとは…想像以上にだめでしたね授業も全く進んでないですしもっとしっかりしてもらわないと先生としてはいけませんね』

「じゃあ今日の喧嘩を止めへんかったんはネギ先生を試すためなん？」

『まあそうですね。それより神楽坂さん、近衛さん買い出しに行くのではなかったのですか？』

「あ、そやったわ、アスナちよつと買い出し付き合ってたー」

『私は歓迎会までに仕事終わらせておきますね、準備頑張ってください』

「ほな、先生あとでなー」

職員室に向かいますか…今日はどのくらい仕事があるんでしょうか

『えっ！？今日はなしですか？』

「ええ、ネギ先生のフォローが大変だろうからって学園長先生が、ネギ先生の授業は上手くいかなかったみたいですね」

そこらへんをぶらついておきましょうか

おやつ？ネギ先生こんなところで何をしているんでしょうか？

名簿に何か書き込んでいますね

「フーンだ」

『ネギ先生？こんなところで何をしているんですか？』

「あ、沢田先生一段落ついたのでやすんでるんです、それにしてもカグラザカアスナ…っていう人の態度が酷いんですよ今日はこの人の部屋に泊れって言われたんですけど絶対泊めてくれないと思うんです

よ」

『彼女はいい子ですよちよつと元気すぎますけど…あなたの授業かなり酷かったですよ喧嘩ぐらいは止められないと2 - Aの担任は務まりませんよ』

「そ…そうですね…頑張ってみます」

『そのいきです』

「あれ…あれは27番の宮崎のどかさん…たくさん本を持って危ないなあ」

『ああ、彼女は本が好きですから図書委員をやっているんですよ』

「！！やっぱし！」

『どうしたんですか？ネギ先生』

宮崎さん落ちてますね、ネギ先生が杖を構えていますし大丈夫でしょうけど一応下に行きますか

「きゃあああああ！」

あそこにいるのは神楽坂さん？！ネギ先生ついに魔法がばれましたねあつネギ先生が神楽坂さんにお姫様だつこで連れてくれましたね

『宮崎さん本はこぶの手伝いしましょうか？』

「あぶぶぶぶ」

そういえば宮崎さんは男性が苦手でしたね

『半分ほど持つので先に歩いてください10メートルほど離れてついて行くので』

いやああああああああ

？神楽坂さんの悲鳴みたいなのが聞こえてきましたね  
ネギ先生が何かしたんでしょう

続  
く

### 第3話（後書き）

火、水、金、土、日更新を目指します

原作の会話少し削った方がいいでしょうか？

これだといつまでたっても修学旅行編にいきませんし

呪文のキーを募集中ですいいのがあったら感想に送ってくださいお願いします

感想なども受け付けています

## 第4話（前書き）

更新します

もうそろそろ冬休みに突入するので更新速度が上がると思っています  
指摘があつたので主人公紹介修正しました

「」のまえに名字を書こうと思います

指摘や感想をお願いします

短いですけども読んでいただけると幸いです



## 第4話

宮崎さんと本を運んで少ししてからから教室に向かうとエヴァさん、茶々丸さん、神楽坂さん以外2 - Aの生徒たちがいました

何やら作業をしているようなので一番近くにいた朝倉さんに何をしているのか聞きましょうか

沢田「朝倉さん何をしているんですか？」

朝倉「おっ、先生いいところに來たね、今ネギ先生の歓迎会の準備してる所なんだよ」

ネギ先生の歓迎会ですか…お祭り好きな2 - Aの生徒は何かあるとすぐに騒ぎを起こしたくなるような癖がありますし

ネギ先生が来たこととお祭り騒ぎをするんでしょうね

相変わらずエヴァさんは皆と一緒にいることが少ないですね。私としてはもっとみんなと仲良くしてほしいのが本当のところなんです。が年齢が年齢ですし中学生と一緒に騒ぎのは無理がありますか…

朝倉「もうちょっとでネギ先生も来るだろうし先生も参加して行つてよ、高畑先生もしずな先生も来るしね」

沢田「途中で抜けれると思いますが参加しますよ楽しそうですし」

エヴァさんに速く帰ってくるように言われましたから

速く帰らないと何されるか……いつかのように呪文的？エヴァさんと茶々丸さんとチャチャゼロによる模擬戦という名のリンチ？どれも別荘で4カ月は療養しましたね茶々丸さんが学園長に風邪で休みだと嘘をついていてくれなかったら今頃私が魔法を知っていることばれてしまっていたでしょうね

朝倉「先生、ネギ先生が来たよ、クラッカー用意して」

ガラッ

2-A「ようこそ ネギ先生ーッ」

ネギ「へ…」

神楽坂さんも驚いてますね…もしかして何があるか流石に忘れてたわけないですね？

神楽坂「あ…そーだ、今日あなたの歓迎会するんだっけ……忘れてた！コレ買い出し」

本当に忘れていたみたいですね…しょうがない子ですね  
勉強の方は数学だけ最近ちょっとはましになってきたんですがね

ネギ「えー……」

「ほらほら主役は真ん中」

ネギ「わぁー嬉しいなあ」

高畑先生の近くに座りますか…ちょっと話したいこともありますし

沢田「高畑先生隣いいですか？」

高畑「おっ沢田先生どうぞ」

ネギ先生がこっちに来たので一言いっておきますか

高畑「やあネギ君初日の授業お疲れさまだったね」

沢田「ネギ先生もあの騒ぎを自分で止められるようにしないといけませんね」

ネギ「いやーなかなかうまくいなくって…」

沢田「私も最初の方は大変でしたけどもなれば止められるようになると思うので頑張ってください」

ネギ「沢田先生…ボク頑張りますっ！」

沢田「そうそのいきですよ私は用事があるのでこれで失礼しますね」  
早乙女「あれ…？沢田先生帰っちゃうの？」

沢田「ええ、ちよつと用事がありましてねちゃんとかたづけてから帰ることとあまり遅くならないようにと皆に言っておいてください  
ね」

早乙女「わかったよーそんじゃあねセンセー」

沢田「はい、さようなら」

これならエヴァさんにも遅いとは言われないでしょう  
暫く歩いてエヴァさんの家にたどり着きました

エヴァ「ほう…案外早かったな守孝」

沢田「ええ、エヴァさんに速く帰って来いと言われましたしそれに  
歓迎会にいたら何かに巻き込まれる気がして…それで大事な話とは  
何でしょうか」

エヴァ「守孝…私の呪いを解くのに足りないものを言ってみろ」

沢田「あと足りないのは…血縁者の血液だけです…ってまさか！」

エヴァ「そう、その通りだ奴の息子がこの学園に来たのだつぎの満  
月あの作戦を実行するぞ」

沢田「分かりましたよ…エヴァさん、私はまたあの姿で行かせても  
らいますよ？ばれたら厄介なので」

エヴァ「フンッ好きにするがいい」

茶々丸さんが見当たりませんね…

沢田「そういえば茶々丸さんはどうしたんですか？」

エヴァ「ん？ああ、あいつなら買物だ…あと少しだあと少しでこ  
の忌々しい呪いから解放されるのだ！」

そういつてエヴァさんは高笑いを始めてしまいました

茶々丸さんが帰ってくるまで高笑いが続いたことはいうまでもないでしょう

#### 第4話（後書き）

グダグダですよね…桜通りの吸血鬼まであと3話ぐらいを考えています

また明日か火曜日に更新します

感想・誤字・脱字・指摘などよろしくお願いします

## 第5話（前書き）

本日投稿します

つぎは明日か26日になります

駄文ですがよろしく願います

今回は三人称に挑戦してみます、問題点などがあれば教えていただ  
けるとありがたいです

主人公全然出ません

## 第5話

side 三人称

神楽坂「高畑先生…あのおいしいお茶が入ったんですが飲んでいただけませんか？」

学校の廊下でアスナがハートマークのなかにホレと書いている見ても怪しい湯呑みを持ってタカミチと向かい合っていた…そして何故か後ろでネギが煙の出るバケツのようなものを持って立っていた

高畑「ふふ これはホレ薬だろ？そんなもの必要ないさ」

神楽坂「え…どーゆーことですか……？」

アスナはタカミチに尋ねた

高畑「なぜならもともと僕は君のこと愛してるからさ」

はっはっはっはと笑いながらタカミチが言いアスナの頬に手を添えた…

高畑「アスナ君…」

神楽坂「た、高畑先生…」

そして二人の顔が近づいていき……

神楽坂「タカハタセン・セ・」

アスナはネギに抱きつきパジャマが半分近く脱げた状態で目を覚ましたそれに当然アスナは何をしたかと言うと…

神楽坂「キヤーーーーーーッ」

明け方5時に寮の全域に聞こえるような叫び声があがった

神楽坂「ちよっちよっとなんた何で私のベッドで寝てんのようーっ」

ネギ「えう…お姉ちゃ…あつ！？アスナさん！？すすす すいません僕いつもお姉ちゃんと一緒に寝てたのでつい…」

ネギは勉強の方はしっかりしているのだがやはり10歳と言うところかまだまだ甘えたがりのようだった

神楽坂「な 何よそれ！？全く子供なんだからあちゃんとソファ

「貸したげたでしょう!!」

二人の叫び声で下のベッドで寝ていた木乃香が起きたことは二人とも気づいていなかった

神楽坂「わっもう5時じゃない行ってくるねこのカー」

ガタン ドタ バタ

アスナは目視出来ないような速さでパジャマから制服に着替え部屋を飛び出した

ネギ「アスナさんどこへ？」

木乃香「んーバイト」

このかは眠そうな目を擦りながらネギの質問に答えた

木乃香「ネギ君朝ごはん作ってあげるよ目玉焼きとスクランブルエッグどっちがええ？」

ネギ「あ…じゃあ目玉焼きで」

木乃香「了解〜」

ネギ（そうだった…僕…先生になるために 日本の麻帆良学園つて所に来て昨日アスナさんとこのかさんの部屋に泊めてもらったんだった）

神楽坂アスナは走っていた

神楽坂「あの糞ガキー泊めなきゃあよかったわ!」

沢田「神楽坂さんおはようございます今日はちよつと遅いですね」

神楽坂「沢田先生おはようございます。沢田先生朝ちよつと…」

沢田「ネギ先生ですか？」

神楽坂「そうなんです!せつかくいい夢見てたのにあいつのせいで…!」

沢田「まあまあ、落ち着いて彼だつてわざとやってるわけでもないんですし…あつそういえば時間大丈夫ですか？」

神楽坂「えっ、あ、すいません先生私急ぎますね!」



沢田「がんばってくださいねー」

神楽坂「全くもーバイトも遅刻しちゃったしホントあんななんか泊めるんじゃないかった」

ネギ「えうつ僕のせいじゃ…」

木乃香「仲悪いなー二人とも」

神楽坂「いいこと？」

ネギ「は ひゃい!？」

アスナがネギの耳を引っ張って

神楽坂「あんたの正体が魔法使いだって知ってるのは私だけなんだからね。いい加減にしないとばらすわよ!! そしたら大騒ぎになつてあんななんか魔女裁判で火あぶりよ火あぶり!」

ネギ「ええー!ー!ー!ー?」

ネギの頭には自分がロープでつるされて火に焼かれている映像が流れた

神楽坂「冗談よ でも私には逆らうんじゃないわよ〜」

木乃香「？」

ネギ（うつ僕先生なのに…）

ネギ「あの昨日行った魔法のホレ薬どうします? ホントに4カ月で出来ますけど」

神楽坂「え……」

今度はアスナの頭にタカミチの顔が近づく映像が流れた

神楽坂「なっ… なな… なーにいつてんの!ー!」

アスナがネギの背中をしばきバァン!とすごい音が鳴った

ネギ「わあっ」

神楽坂「勇気がホントの魔法ってのはあんたが言ったんでしょ 自分の力でなんとかするわよ」

アスナは迷いなく言いきった

ネギ「あ……（え、えらい！やっぱり見た目よりいい人だあ）アスナさんスゴいなあ　僕も頑張らなきゃ」

アスナとこのかは靴を履き替えるためネギといったん離れた

ネギ「3月までの間　立派に先生を務めておじいちゃんみたいな立派な魔法使いになるんだ」

そうしてネギは職員用の下駄箱に向かった

ナギ「ん？ん？ん？と届かな……」

しかし自分の場所に手を伸ばしてみるが届かない

その時後ろから手が伸びてきた

雪広「おはようございますネギ先生教室までご案内いたしますわ」

後ろにいたのは雪広　あやか2・Aの委員長だった

ネギ「おはようございますいいんちよーさん」

雪広「雪広あやかでございませう昨晩はよく眠れましたか？」

ネギ「ええとつても」

2・Aの教室の前に来ると宮崎のどかが窓から廊下を見ていた  
ネギ達を見つけると

宮崎「あ……」

ネギ「あ、おはようございます宮崎さん」

宮崎「おは、おはよーです」

これからネギのちゃんとした初めての授業が始まるのだった

## 第5話（後書き）

主人公全然出なくてすいません

## ちょっとしたお知らせ

前回冬休み中に投稿するとかほざきながらまったく投稿しなかったこの駄目な作者からの質問です

私を書いてこの小説皆さんから見ても面白いですか？

私は自分で読み直してとても恥ずかしかったです

口調はおかしくなるわ地の文も説明風で読みにくいと思ってしまいました・・・

なので皆さんにお聞きしたいのです

この小説を書きなおそうと思っています

主人公の設定などは変えませんが地の文や原作キャラの口調やらをもっと学んでから書いていきたいと思っています

皆さんは書き直した方がいいかそれともこのままでいいか教えてほしいのです

皆さんご協力よろしく願いいたします

活動報告に書いてもらうかも感想として送っていただかしていただけとありがたいです

書き直すとしたら原作1話を1話に書きこむという長い文章になると思いますのでよろしく願います

ついでに主人公の始動キーを応募しています 作者にはセンスのかけらもないので3週間ほど考えても思いつきませんでした

どうかご協力をお願いします

これからもこの駄目作者を見放さないでいただきたいと思っています  
何かアドバイスがあったら教えてください文を作るのは初心者なので

## 第6話（前書き）

何とか出来ました：暫く書いていなかったたのでおかしなところがあるかもしれませんがそこは目をつぶっていただけだと思います  
今回は今までで1番長いと思いますが会話の部分が多く地の文が少  
ないです

次は日曜日にも投稿します

## 第6話

side 3人称

ネギがドアを開けて教室に入るときに仕掛けられていた黒板消しが落ちてくるのを雪広がキャッチした

宮崎「き、起立ー！ー気を付けー！ー礼いー」

2-A「「おはようございます」」

ネギ「お・・・おはようございます」

宮崎「着席ー」

何故聞こえるのかはわからないが口パクでアスナとネギは会話をしていた

アスナ「しっかりやんなさいよ」

ネギ「わ、わかってますよアスナさん」

窓側にいた沢田が立ちあがって言った

沢田「ネギ先生、授業を始める前に言っておきますが何か教師としていけないことをしたら自習にして説教をするのでそれは分かっています、ご了承くださいね？」

ネギ「あ、はいわかりました」

沢田「では、授業を始めてください」

ネギ「では一時間目をはじめますテキストの76ページを開いてください」

ネギが促して授業が始まった

ネギ「The fall of Jason the flower.  
Spring came. Jason the flower  
was born on a branch of a tall  
tree. Hundreds of flowers were  
born on the tree. They were all  
friends」

ネギ（昨日は上手いかなかったから今日は頑張らないと・・・）

ネギ「今の所誰に訳してもらうかなあ……えーと……」

ネギが教室を見渡すとネギが歩いてきた付近の生徒は顔を逸らした  
沢田（全く……みんな全然答える気がありませんね…次の時間から  
全員当てるようにしましょうか…でもそんなことしたらエヴァさん  
が怖いですしどうするべきか……」

ネギがちょうどアスナの前に来た時アスナはすごい勢いでペン回し  
をしながら目をそらしていたというよりも顔をそらしていた

ネギ「じゃあアスナさん」

しかしアスナの健闘もむなしくネギはアスナに訳すように言った  
アスナ「な…何で私を当てるのようっ!？」

アスナは何故自分が当てられたのか分かっていないようだった  
ネギ「えっ…だって」

神楽坂「フツ―は日付とか出席番号で当てるでしょ」

ネギ「でもアスナさんア行じゃないですか……」

神楽坂「アスナは名前じゃん」

ネギ「あと感謝の意味も込めて……」

神楽坂「何の感謝よっ!？」

雪広「要するに分からないんですわね。アスナさんでは委員長の私  
がー」

パンパン!!

教室に手をたたく音が響いた…

沢田「ネギ先生少しいですか？」

座っていた沢田が立ちあがり行った

ネギ「えっ?あ、はいどうぞ」

沢田「雪広さん?、人をバカにするのはあまり良いことはありませんね…それにこの問題をあなたが解いてしまつては神楽坂さんは  
このまま分らないところが増えてしまい授業についていけなくな  
るかもしれないので此処は神楽坂さんにやらせてあげなさい…分か  
りましたね?」

雪広「ええ、分かりましたわ」

沢田「では、神楽坂さん落ち着いてよく考えてみてください」

神楽坂「分かったわよ…訳せばいいんでしょう？訳せば…」

神楽坂「ジェイソンが…花の上…に落ち春が来た？ジェイソンとその花は…えと…高い木で食べたブランチで…骨が100本？」

神楽坂「えーと…骨が…木の………」

アスナは全く意味の通じない日本語を並べていた

そんなアスナの様子にネギは

ネギ「アスナさん英語ダメなんー」

パンパン！！

ネギの言葉は途中で手をたたく音に遮られた

音が鳴った所には沢田がいてそして沢田はこう宣言した

沢田「はい、皆さんこれから自習になります、騒いで周りの生徒に迷惑をかけないようにしてくださいね」

ネギ「え？あ、あの授業は？」

沢田はいつもと同じように笑顔だったが目は笑っていなかった…そして3-Aはこれはヤバイと思い静かになった…

沢田「ネギ先生？私は最初に言いましたよね、何か教師としていけないことをしたら自習にして説教をする…今貴方は教師として決してやってはいけないことをやってしまったので説教の時間です」

古「ネギ先生沢田先生のお説教はすこしきついアルから頑張るアルよー！」

ある教室に1人の男性と1人の正座をした少年がいた

しかし男性は床に正座している少年を見下しながら言った

沢田「ネギ先生？今なぜあなたは怒られているのか分かりますか？」

明らかに沢田の声には怒りがこもっていた

ネギ「いえ…分かりません……」

沢田「なら教えて差し上げましょう…さっきネギ先生は神楽坂さんに何を言いかけたんですか？正直に言ってくださいね」



ネギ「アスナさん英語ダメなんですネーです…」

沢田「それです…もし神楽坂さんが自分で訳さなかったら言ってもまあいいのですがさつきは神楽坂さんは自分のできる限りの事をしたんですそれをあなたはバカにしようと思いました。生徒が頑張ったらずらいの言葉をかけたほうがいいのですそれなのにあなたは労いもなしに何を言いました？神楽坂さんは英語ダメなんですネー？ふざけてるんですか？そんな生徒をバカにするような教師はいりません」

ネギ「あううううう」

沢田「ふう…今回は初めてなのでこれぐらいにしておきますがまた何かあったらすぐに説教しますので。反省したら授業が終わってから神楽坂さんに謝りに行くように」

ネギ「はい…分かりました」

キンコンカーンコン

授業の終了を告げるチャイムが鳴った

ピンポンパーンポーン

『沢田守孝先生…沢田守孝先生…至急学園長室までお越しください  
繰り返します沢田守孝先生…至急学園長室までお越しください』

沢田「私は呼ばれたので行きますがこれからは同じようなことはないようにしてくださいね？」

沢田は学園長室の前に来ていた

コンコン

沢田は扉をノックした

沢田「学園長先生…沢田です」

近衛「おお、沢田先生入ってきとくれ」

扉を開くとその奥には後頭部が異常に長い老人が座っていた

沢田「学園長先生？私に何か用ですか？」

近衛「そうじゃ、ネギ先生はどうかね？しっかり教師としての責務をはたしているかのお？」

沢田「今日は授業の方は問題はなかったのですが少し先生として相応しくないことをしたので自習にして説教はしました」

近衛「う、うむそうかの、ならいいんじゃないがネギ君はまだ若いんじゃないからそんなにきつくしないで欲しいのじゃが…ダメかのお？」

沢田「甘やかすだけではいけないので私は教師として必要最低限の事を教えようと思うのですが…それに10歳に教師をやらせるのは私はまだ納得していないのですが」

近衛「そついわれてものお」

沢田「もう決まってしまうことだからもういいませんが納得していない人がいるということは忘れないようにしてくださいね」

近衛「わかったのじゃ」

沢田「では私も授業があるので何もなければこれで失礼しますが」

近衛「うむ、もう行ってもらってもかまわんよ」

沢田「では失礼します」

ガチャン

沢田は廊下に出て一息ついてから言った

沢田「さて、授業に行きますか…次は3・Bですね…」

しかしまたネギによって事件が引き起こされるとはその時は知らなかった

## 第6話（後書き）

感想や評価お願いします

今も沢田の始動キーを募集しています

何かいいのがあったら教えていただけたらありがたいです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2679p/>

---

魔法先生ネギま！ 普通？の先生がゆく

2011年1月29日02時34分発行